

# 東南アジア華人社会の伝統芸能

——農暦七・八・九月の祭祀と地方劇

尾 上 兼 英

## 目次

### 一 調査の目的

二 シンガポールの中元節（第八十二冊）

三 シンガポールの斉天大聖聖誕 他

四 マレーシアの九皇爺法会（以上本号）

五 タイの宗祠

六 補記

### 三 シンガポールの斉天大聖聖誕 他

農暦八月に入ると盂蘭勝会は終り、聖誕日を迎えて諸神の祭祀が始まる。神の名は、玄天上帝、三田都元帥、

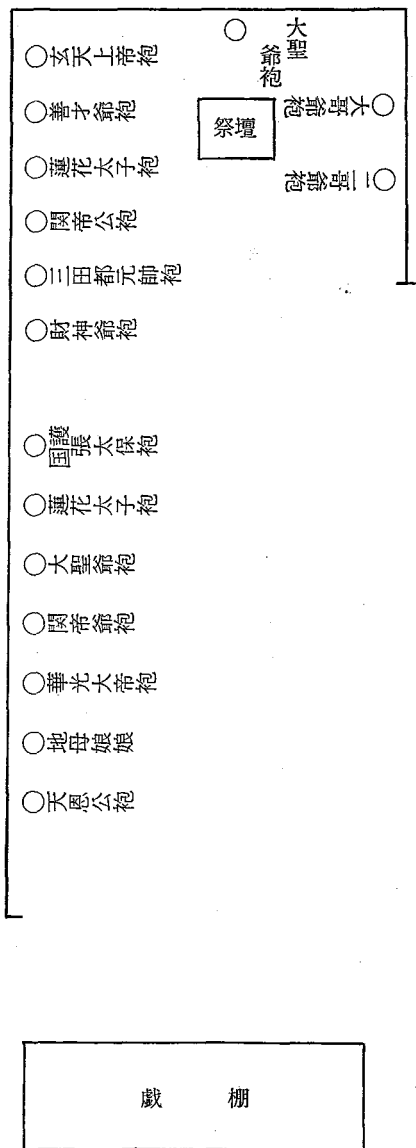
國張

東南アジア華人社会の伝統芸能

太保、福德正神、烏面元帥、蓮花三太子、巍山大王、広沢尊王、天地父母等であるが、とくに数か所で盛大な祭祀が行われるのが、齊天大聖である。齊天大聖は、大聖仏祖、大聖爺爺とも称せられ、聖誕は正月十六日と八月十六日の二回である。——クアラ・ルンプルの観音寺は八月十六日の一回である。

演劇の奉納は、聖宝壇、聖南壇は八月、齊天宮は正月であって、いずれも福建劇である。新興の慈忠壇は演劇はしないとのことである。齊天大聖が福建系民衆の信仰の対象であることは予想したことであったが、ほど確認できた。

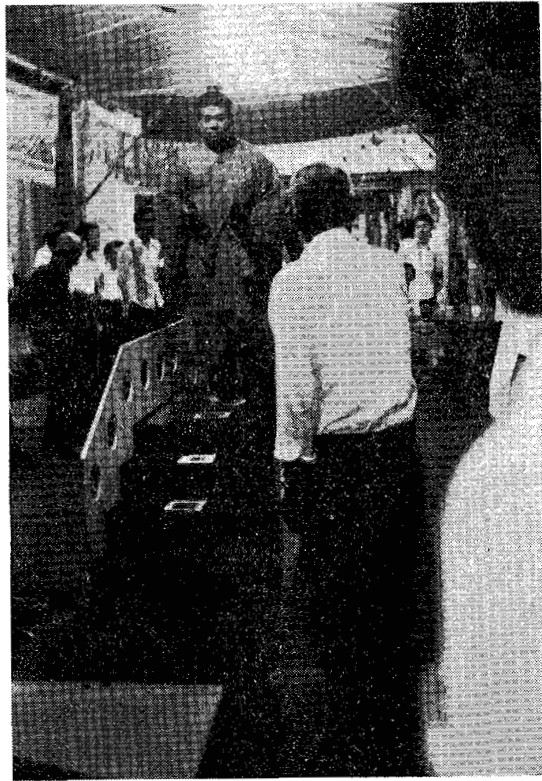
齊天大聖を主神とするが、時期が他より早いのが華興堂 (Queen's) である。ここでは玄天上帝、三田都元帥、<sup>國藤</sup>張太保の祭事を兼ね、祭壇の周囲に左図のように紙製の神袍を飾る。





鞭の頭

最後の夜の祭事を観察したが、ドラの音に合わせて祭壇の前に座った童胤がしだいに神がかりとなり、やがて胃の中の物を吐き出し、傍からの質問に朱筆を執って神の文字と称する読めない文字を書く。なお、童胤と同時に女巫もやはり神が憑依した状態となって、童胤の夢遊状態になるのを助け、鞭を持った童胤の傍をつかず離れずつき添って、祭壇と戯棚の間まで来ると地を下して仮祭壇を作り、そこに線香を供えて祈る。時折猿のしぐさをするのは、童胤に齐天大聖が憑依していることを示すのであろう。そこで紙銭を焼いて祈り、終って催眠状態から解かれる。これは童胤を見た始めて経験であったので、施術から解術の経過を十分見定めることができなかつたが、孟蘭勝会が僧侶にせよ道士にせよ清醮と読経が主であるのに対して、「神話」<sup>シエンホフ</sup>によって信者の「問事」に答える占いが主であることが、対照的である。演劇の方は、この間も、よどみなく進行していた。なおここでの演劇は、老玉楼春班潮州劇であった。最も規模の大きいのは農曆十五日から十九日に至る聖宝壇の齐天大聖の祭りである。今年は壇の創立五周年というので、歴史はまだ浅いが、新賽鳳劇団の閩劇が四晩連続で上演され（劇目は二種）、第五夜は歌台で青年にサービスをする。初日に道士が清醮を



平安関を渡る道士

巡するため出発、各処で下りて「遊街」をして十時半頃に Gennil Lane に帰り、地元町内を巡回した。夜もふけており街灯もないので発電車を伴っているのは三年前に見たのと変らなかつた様子である。この遊街では、とくに高脚が印象的であつたと中嶋氏から聞いたが、肝腎のこの日と翌日——三年前には、この夕、演劇の始まる前に功労者の表賞式をした。これによって教団の勢力範囲が確認できる——の両日は発熱して夜間の外出が不可能となつた。従つて前回見た部分だけが、今回すっぽり抜けてしまつたのは残念である。十八日の夜、酒会を行い、最終日は舞台の歌

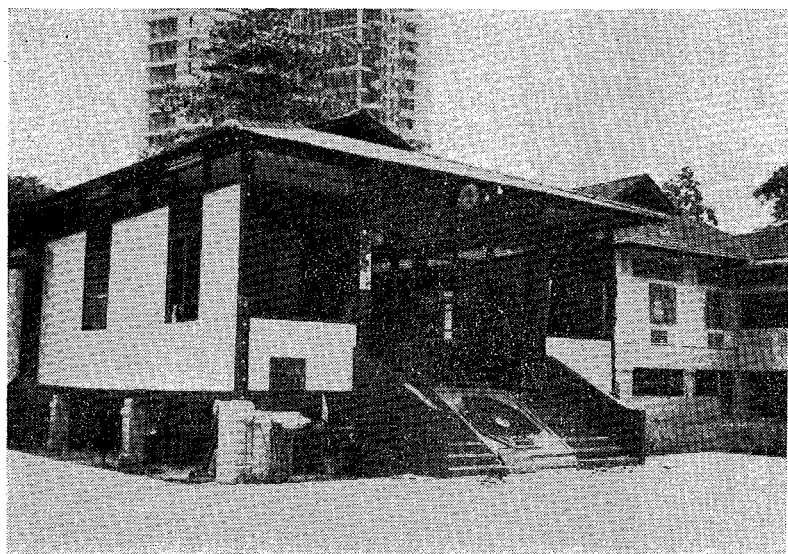
し、二日目に「平安関」を越える祭事が祭壇前で行われた。子供たちが嬉々として木製の橋を渡つて道士からシャツに印を捺してもらふ。終ると橋を解体してしまつた。第三日の夕方、童叟が三人、頬に小指ほどの太さの金属製の槍を通し、(長さは三メートル位)腕に無数の針を刺して神前を一廻りし、続いて凌雲殿、聚英体育会、聖宝殿舞龍隊、聖宝殿醒獅隊、少峰山国術健身社の旗を連ねて龍・醒獅団も神前を廻るとトラックに乗り信者の居住区を一

台と観客の青年を残して片付けにかかる。これは本年もたぶん同様であつたらう。

聖宝壇に一日遅れて、聖南壇の斉天大聖の神事が行われた。ここは十七日の午前十時に「遊街」が始まる。まず女一人男二人の童乩が憑依し、斉天大聖の輿と、龍などとともにトラックに乗り、信者はバスに乗って随行する。十一時に出発して、各地区に設けられた祭壇で神輿を左右に大きく揺って神威を示し、神の憑依した童乩がお払いをして廻って午後三時頃に McCallum St. の本殿へ帰って来た。つまり農曆八月十七日の日中は聖南壇、夜間は聖宝壇の「遊街」であるが、領域はかなり重複しているようである。聖南壇は新麒麟團劇団の演劇が三日にわたって奉納された。

Eng Hoan St. の斉天宮は正月に「酬神戯」を行い、八月は「遊街」だけである。農曆八月十六日の午後四時に「遊街」を開始し、その後には酒会をするが、この領域は狭く、すべて徒歩であつた。この「遊街」は終始観察したので、記録しておこう。

四時十五分、童乩を囲んで健身団の少年たちがドラを打ち、歌をうたう（福建語とのことである）。始めはゆっくり、やがて調子を早め烈しくドラを打つと、半裸の童乩はそれに合わせて首を左右に廻す。やがて胸の筋肉がけいれんを起し始め、座った形のまゝ跳ね上り、その形のまゝ椅子に落ちる。かくて斉天大聖が憑依した童乩は、不足の品物を要求し、衣服、冠をつけてもらおうと針を並べてうって針の山状にした椅子に跳ねて座り、並べられた神輿の出発の順序を指示する。数台の神輿のあとを、童乩は鞭で地を打ちながら頭と体を左右に揺り随う。Keng Kiat St. に運んできた紙の神殿を据え、神文を読み神殿に火をつける。あわせて紙銭を燃やし、まず童乩が一周、ついで信者と神輿が一周し「遊街」を続ける。童乩はなおも火中へ飛び込もうとするのを、世話役がひきとめる。Peng Nguan St.



慈 忠 壇

から Moh Guan Terrace の華山寺へ来ると、神輿がつぎに寺廟内に躍り込み挨拶をする。それから Seng Poh Rd. を通って齊天宮へ戻るが、最後の数十メートルは疾走する。童舩は本殿に馳け込むと椅子に座り、祈禱をして憑依を解く。椅子から跳ね上った瞬間に神は去り、童舩は正気に戻る。酒会に誘われたが、その後は功労者の表賞と親睦の会はずなので失礼して聖宝壇へ行った。

Bukit Timah Rd. の Balmoral Rd. の北側に慈忠壇がある。黄老仙師(黄石公)、大聖仏祖、太上老君を祭神とする廟で、歴史は比較的新しく、一九六一年に陳不礼(鉄廊巷)で創立し、六五年に壇を設け、七二年に政府に登録を申請して認められ、七六年に現位置に廟堂を建てたという。八月十六日に大聖仏祖聖誕を祝うが「酬神戯」はないというので、確認はしなかったが、新興の信仰集団と思われる。シンガポールには、同系の廟が麦波申路(慈忠廟一九六〇年創立、武吉知馬律九条石半牛奶場路(慈雲山宮一九六三年創立)の二個所にあり、マレーシアには、北から Taiping

(太平)に慈心廟、New Kopisan (新咖啡山)に黄老仙師古廟、Kuala Lumpur (吉隆坡)に慈忠廟、慈孝廟、慈德廟、Klang (吧生)に慈義廟、Pulau Kem (吉胆島)に黄老仙師廟、Titi (知知)に慈仁堂、Seremban (芙蓉)に慈仁廟、慈信堂、Bahau (馬口)に慈忠廟、Segamat (昔加末)に慈忠堂、Malacca (馬六甲)に慈忠廟、德蘭達軍營仙師廟、Yong Peng (永平)に慈忠堂、Batu Pahat (峇株巴轄)に慈德堂と、十六個所に廟をもっている(新加坡慈忠壇、慶祝黄老仙師下凡聖誕暨第十八週年紀念特刊による)。いずれも黄老仙師を主神とするが、大聖仏祖を併祀するものも多いと思われる。

シンガポールの慈雲山はもと黄老仙師廟の名で創建し、同年中に改名している。ここは他の神仏を祭神とはしな  
5。

Seremban は前記二廟の他に、慈忠堂があって、慈忠壇十八周年紀念に祝詞を寄せている。

Malacca の德蘭達軍營の仙師廟は、三神を祀っている。もと軍営内にあった廟の位置に教堂 (Church) を建てようとしてブルドーザーを使ったが、廟の入口まで来ると自然に停止するので、廟を軍營の入口に移築してやっと工事を進めることができたという。

この宗旨は、慈・忠・信・義・礼・倫・節・孝・廉・徳の十の徳目の実行を標榜している。従って慈仁と慈心を除き各廟の名は、慈とこの徳目の組合せである。

童乩の役割は「問事解答疑難、消災解降、治病驅邪」であるので「邪降、疾病、頑症、奇難雜症、神經失常、家宅吉凶、婚姻和合、事業成敗、翁姑不睦、隣里是非」といった問題の解決に当るといふ。

これについてはペナンの劉果因氏から次のような話を聞いた。マレーシアでは今日でも一般に病院は人の死ぬ場



金王廟の「問事」(中嶋氏撮影)

所であると思われる。病気になる、まず董岳を頼り、それから中医の所へ行き、手遅れになってから西医の病院へ行く。従って病院で最期を迎える人が多いというのである。現実に「問事」の場に居合わせ、質問内容の見当のついたのは、シンガポールの鉄玄壇の場合(何かをする日取りについて)と、タイのバンセンの金王爺新廟の場合(これは商売についてであったと中嶋氏から聞いた)であった。(上掲の写真)

これらの教壇は社会事業にも熱心であり、シンガポールの慈忠廟は中医施診所をもって施療しており、また慈雲山宮は教育奨や奨学金を出しており、慈忠壇は新加坡男童收容所に揺臂電鋸を寄附し、Jurong のドックで「拝羅斯号」が爆発事故を起した際に募金活動などをしている。

マラッカで見た斉天大聖の廟の前には次のような佈告があった。

#### 本府斉天大聖

在一九七九年九月十三日、救済貧苦難民分被白米及牛奶、凡年紀在六十歳以上、前来報名領取、人数又限一百至二百人左右、在八月一日起、前来報名、到九月十三日、前来領、在農曆八月十六日、斉天大聖千秋。

本府理事人謝



これは貧民への施しであるが、「添油銭」や「楽捐」の中から社会事業への寄附は、かなり行われている模様である。たとえば九皇爺を祀る斗母宮の場合、北海 (Butterworth) 新苞觀音亭は、一、〇〇〇マレーシアドルを北中華公学の二校と日落斗哇益僑学校の建設資金に寄附しており、北海拉惹烏達律の斗母宮も、上記三校に各一、〇〇〇マレーシアドル、南華医院に一、〇〇〇マレーシアドルを、それぞれ寄附している。(光華日報七九、一〇、三〇)

前回 (一九七六年) シンガポールで見た「酬神戲」に「齊天大聖千秋」の横幕が多いので、南洋大学の先生方に質問をして、中秋節は人節であって兒童の祭であるから孫悟空に人気が集るためだという教示を得たが、これは見当違いであったようだ。(紀要第75冊拙文34ページの記述を訂正する)

タイのバンコク Yawarat Rd. (耀華力路) にも齊天大聖の廟があり、八月十六日に祭祀が行われ「酬神戲」もあるが、一九七九年は「坐唱」という小規模のものであった。

ペナン島の極楽寺にも齊天大聖が祭られているという (劉果因氏の話)。Pengkajeneh Weld の清若宮も齊天大聖の廟であった。

他の諸神仏とともに正月十六日か八月十六日の聖誕に祭られる場合は、他にも多くの例がある。(付表3参照) 柔仏古廟では、十一月十五日を聖誕とするのが例外であろうか。

その他の神を主祭神とする祭祀は、鉄玄壇 (Fisher St.) の烏面元帥があり、一九七六年の時と同様、新栄和興班 (潮劇) の「酬神戲」には狭い通りいっばいの観客がいたが、祭壇の童乩に「問事」に來た信者と戯棚に群がる人の間には、交流が認められなかった。

また祭壇をもたぬ演戯が、Sungei Rd. と Kelantan Rd. の交わる辺り、Rochor Canal に沿った道路で行われていた。莆仙業余劇団といい、巍山大王への「酬神戯」である。莆仙は福建省の北部、莆田・仙遊地区を指し、中嶋氏の話では方言としても、福州や漳・泉州とは独立した地域だという。演劇の上からも、莆田・仙遊および惠安北部、福清南部と晉江・永泰との県境の限られた地域に流行した地方劇である。当然、その地域の方言（興化方言）を話す華僑・華人も限られており、従って職業劇団を持たないが、業余劇団とはいえ、このような劇種に出会うのは幸運というほかない。

莆仙劇については、福建省戯曲改進黨委員会の陳嘯高、顧曼莊両氏の紹介があり（『華東戯曲劇種介紹』第二集）かねてから注目していた。

一は起源未詳ながら、唐の玄宗と関係づける伝承をもつこと。

二は莆仙劇の祖師を田公元帥とすること。

三は地方色が濃厚な素朴な大鼓戯と京劇・閩劇の影響をうけて洗練された小鼓戯とに現在は分れているが、伝統演目を演ずる大鼓戯は、南戯あるいは明初の伝奇と配役が同じであり、所作に傀儡戯の傀儡の動作をまねた型を伝えてきていること。

四は莆田が南宋時代の対外交流の港であったこと。

五は俳優が「売身制」による「子弟組」の制度をもって組織されていたこと。従って社会的地位も一段低く位置づけられていた。

これらのうちで、傀儡戯の直系と見られること、対外交流の港であったこと、田公元帥を祖師と仰ぎ、莆田の田公

廟には当時の劇団名を記した戲船禁止の碑があることなどが、今後の課題として関心をひく点である。元の雜劇の突然の開花を傀儡戲の延長としてみるという仮設は、孫楷第氏が陰微な形で提出しているが、莆仙戲はそれを裏づける資料となりうるかもしれない。田公元帥は玄宗の御前供奉であつた雷海青と伝えられ、安祿山に樂器を投げつけて殺されたという。田都元帥あるいは田府元帥と短絡させることは慎しむべきであろうが、抵抗者の系譜として妙に氣になる。

莆仙劇の演出上の特色に、

(一) 開場を告げる銅鑼と太鼓のあとに、神將が一人登場し、舞台裏から「盛世江南景、春風画錦堂、一枝紅芍藥、開出滿天紅」の四句を斉唱し、ついで田公元帥の咒「ロリレン、ロレン、リレン、ロレン、リレン、リレン、リレン、リレン」を唱え、次に紅袍を着、瓦楞巾をかぶり、三綵鬚をつけた頭出生が開場の白「一篇翰林黃卷、多少礼部文章、琴彈陽春白雪、引動公侯將相」を朗誦し、それから演戲を始める。

(二) 慶事には特定の「雜扮」を加えるが、一般の祝賀には「加冠」、老人の誕生日には「美八仙」、婚礼には「八仙送子」、役人の宴会には「狀元遊街」を演ずるといふ。

(三) 上演用のテキストの書き方の形式は傀儡戲と同じであり、音楽の場合も古い演目は管樂器と打樂器で弦樂器は使わず、その点で傀儡戲と同じであり、曲調に「大影戲」などの名称が見られる。

大影戲は南宋の影戲で始めて見られる語で、番影戲とともに影戲に人間が登場する場合をいうが、莆仙戲の曲調にこの名があることは、傀儡戲との關係を予想させる。

(四) 莆仙戲の歌唱には、一人が歌うと末句を登場人物が斉唱するという形式があるといふ。

これらの(一)(二)(三)の特徴を Kalang River 沿いの戯棚で確認しなかったが、当日上演の「皇叔充軍」は大鼓戲の劇目には見当たらないので——もっとも現存する古劇の全目の記録はないので、ないとは断定できないが——あるいは小鼓戲に属する演目かもしれない。また開始の時間が予想より早かったため、(一)(二)には遅れて確認できなかった。(三)については音楽の知識が不足し、また傀儡戲を見る機会が少いので共通性を確かめることはできなかった。(四)については、終始気をつけていたが、それらしい場面がなく、観客に質問したが、こうした形式に対する関心はないようで、結局莆仙戲の特徴を確認することはできず宿題となった。

業余劇団は職業劇団と違って演技力は劣るが、舞台前にテーブルを並べて家族たちが声援を送り、俳優の側も舞台の袖から手を振ったり、主演俳優が演技をしながら小道具の位置を変えさせたり若い俳優に演技指導をしたりする。全体に自分の演技が終ると観客の方をきよるきよる見たり、傍を見ていたりするが、舞台と観客の間に一体感があり、ゆきずりの我々にも親切である。

莆仙業余劇団のほかに興安業余劇団があり興味をひかれたが、主催者も場所も確認できなかった。祭神は齊天大聖である。

農曆八月には、他に福德神社が玄天上帝、福德正神、広沢尊王、天地父母、衆位諸神を祭るが、この神社所在の水廊頭の位置が確認できず、これも宿題となった。

#### 四 マレーシアの九皇爺法会

(付) シンガポール・タイ

農曆九月一日から九日までは、香港では見られなかった九皇大帝の聖誕祭が、マレーシア、シンガポール、タイ等で一斉に行われる。前回、シンガポールで得た情報によると、ペナン島の祭祀が最大規模であるというので、調査地点の確認と各地の情報を集めるため、農曆八月二十八日にペナンへ行き、原田正巳「マレーシアの九皇信仰」(東方宗教第53号)に資料を提供された劉果因氏と連絡を取り、原田論文では中国名で地名が示されている位置の同定、情報交換の交換をするとともに、斗母宮がペナン島ジョージタウンのどういう地域に信者をもつかの調査を開始した。

ペナンの開発は、客属、広東幫、福建幫のいずれが最初かについては意見が分れるようであり、記録も定かでないとのことであるが、博物館で開拓功労者として展示しているのは、福建幫の四姓と広東幫の一姓である。

Khoo Kongsi (邱氏普山堂) Armenian St., Tan Kongsi (陳氏頴川堂) King St., Cheah Kongsi (謝氏世德堂) Armenian St., Yeoh Kongsi (楊氏植德堂) Lebuh Victoria, Lim Kongsi (林氏九龍堂) Lebuh Ah Quee,

とか、 Penang Rd., Lebuh Muntri, Lebuh Pantai, Jalan Prangin に囲まれる中心街には、その他にも公會館、宗廟が軒を連ねてと形容したくなるほど多い。

邱氏菴山堂は本格的な舞台をもち、宗廟としては大規模である。正面の正順宮には王孫爺爺、大使爺爺を祀り、背後の室の両側面に碑文がある。また向って左、誦教堂には歴代の神位が並べられ、右の一室には福德正神が祀られて



竜山堂の正順宮から見た舞台

一四

いる。戯台の傍の棟に  
会社の事務室がある。

その近く Armenian

St. の福徳正神廟（大  
伯公）は、折から戯棚  
を解体中であつたので、  
入ってみると、

宝福社慶祝大伯公

聖誕千秋通告

謹訂於歲次己未年八  
月廿三日（星期六）起

一連三天聘請雅声閣

劇団日夜公演酬神、

正日農曆八月廿三日

聘名道士林長杉主持

設壇做醮一天、以祈求風調雨順、合境平安、檳州繁榮  
慶祝儀式

上午八時舉行請神儀式

上午十一時舉行衍辰儀式

農曆八月廿三日  
中午十二時卜選炉主頭家

下午四時設供犒軍

晚上八時舉行過大儀式

慶祝委員會全人、歡迎衆善男信女光臨參觀膜拜、全時歡迎參觀膜拜之善男信女

借紅色求財氣 乞赴龜添福壽 添香油保平安

慶祝大伯公聖誕小組委員會全人啓

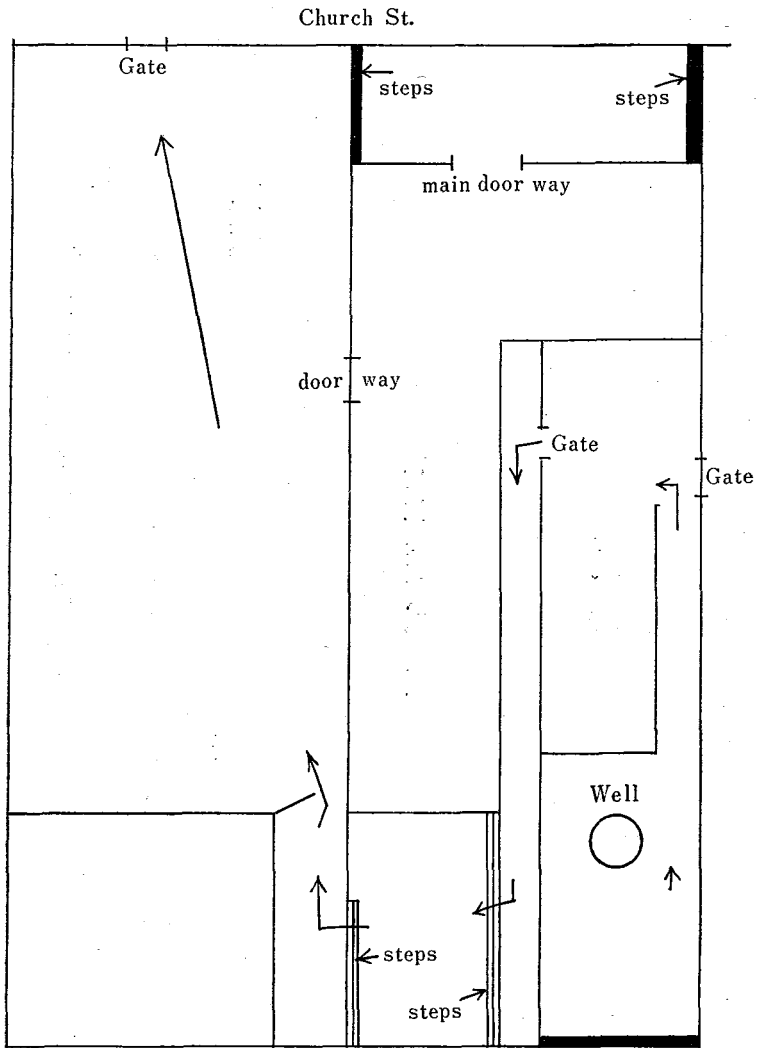
の佈告があり、それに「善男信女、乞紅色請於下午三時前來」と書き込みがしてあった。

ペナン島へ着く以前に、祭祀は終わっているので參觀の機会はなかったが、正面に大伯公、向って右に雷部天君、左に雷部天后が祀られており、創建が一八四四年ということなので、古い記録について尋ねてみた。すると Penang Gazette; Sunday 4th August, 1867 の記事を見せられた。Plan of Chee Hin; Secret Society Headquarters 及び Ghee Hin (義興) 及び Whiteflag Society の連合軍對 Toh-Peh-Kong (大伯公) 及び Redflag Society の連合軍との械闘の記事であり、この宝福社は前者の司令部である。

会党の問題はともかくとして、ここでは閩劇団をシンガポールから招くとのことであり、潮州人も広東人も見物に来るといふ。また花電車式に飾った山車も出すのだといふ。

Lag. Soo Hong には張天師の千秋を慶祝するため北馬方言歌芝劇団の仮設舞台があったが、これは話劇か歌台か

司令部の図



東洋文化研究所紀要 第八十三册



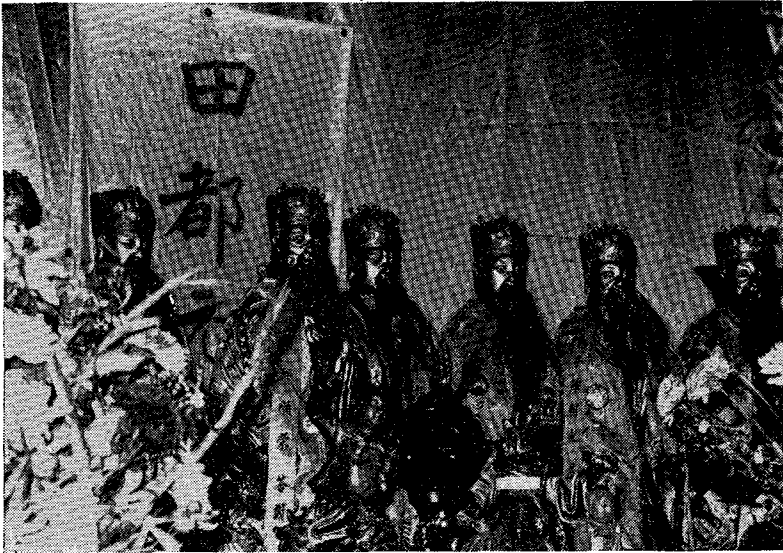
の準備中と見うけられた。

ところで、これら中心街を西へ行くと、Jalan Prangin と Jalan Maxwell に挟まれたクリークがあり、これを渡ると街の感じが一変する。これまで見た地域は商業が中心であり、街並も整っているが、この西方地域に入ると打金等の小工業が目立ち始め、いわば下町へ入ったという感じをうける。九皇爺を祀るのは頭条路 Jalan Magazine、二条路 Lebuh Noordin、香港巷 Lebuh Hong Kong の斗母宮と、車水路 Jalan Macalister の観音寺であるが、「酬神戯」をするのは頭条路と二条路の斗母宮であり、香港巷の斗母宮は「遊街」のみである。観音寺では温梓川氏の紹介で七十五歳になる和尚、釈真果氏から観音寺と九皇爺の関係について話を聞くことができた。観音寺は一九二三年創建され、翌二四年真果和尚は請われて福建省鼓山県からペナンへ来たとのことで、九皇爺はもと打鉄街の李氏宗祠に祀られていたが、観音寺創建の頃持ち込まれたもので、本来寺院とは関係がない。従って観音寺には童乩もないし、九皇爺の聖誕で賑わっているが、夕方五時から貧しい人に精進料理を提供し、和尚は仏を拝むだけであるとのことであった。九皇爺信仰が福建幫だけであることからみても、福建系の寺院へ遷祀することは十分考えられることであり、何かの事情で祭祀が続けられなくなったから遷じたのであろう。観音寺が高級住宅地域に接しており、ここで九皇爺が祀られることの疑問は、この説明で解消した。

さて、主要な調査目標とした頭条路の斗母宮での観察を記録しておこう。

#### 頭条路の斗母宮

まず準備で賑わう斗母宮へ、農曆八月二十九日に行って行事日程の確認をした。



神像大帝九皇の宮母斗路条頭

由八月三十日起至九月初九日一連十天、聘請後鳳閣劇団  
献演酬神。

八月三十日晚上十時一刻 迎請九皇大帝聖駕。

九月初一日上午九点 將請火前往城隍廟・清竜宮大帝

爺・万脚蘭福興宮清水祖師・青草巷鳳山寺・吡叻律天受宮

大伯公・海珠嶼大伯公・灣島頭水美宮・玻璃池滑福寿宮水

仙王・車水路觀音寺・椰脚広福宮觀音佛祖・椰脚宝福社大

伯公參香、帰途并往正・副炉主府上祝寿。

九月初三日晚上七時半 衆神道(訛童)下降耍油鍋(練

風油)。

九月初四日晚上七点 請火遊境儀式。

九月初六日上午七時半 聘請全鎮壇道士、設壇作醮。

晚上八点 衆神道下降抱紅柑(耍火球)。

九月初九日晚上十時一刻 送九皇大帝回駕。并設「平

安閣」及「添寿閣」。

これで祭祀行事の大体は摺めたので、八月三十日の夕刻  
から行事の過程について観察した。建物は二階建であり、

九皇大帝は二階に祭られる。現在の位置に移った経過は、

「横城頭条路斗母宮九皇大帝一九五七年歲次丁酉建置宮殿徵信録」によると

本宮於一九五六年歲次丙申九月、慶祝九皇大帝聖誕日期、由当年正炷主邱清來君提議、对九皇大帝每逢誕辰期間、

無一定之壇位、甚感不便、經大衆附議贊成、隨即組織建置宮殿事、宜即選舉籌備委員。(委員名略)

負責進行購置頭条路門牌一百号、作為長久宮殿、經數月之修整、頗熱心菜友自動樂捐、方得落成。謹將獻捐芳名列

誌銅牌、表揚共襄義舉之仁風。(獻捐者名略)

以上計四十名共捐銀一万五千八百元

一九五七年元月一日立

とあって、詳細に知ることができる。つまり一九五六年以前は一定の宮殿をもたず、現在地に宮殿をもったのは一九五七年以後ということであり、宮殿の歴史は古くはない。

宮殿内の構造は、次頁の図に示す。

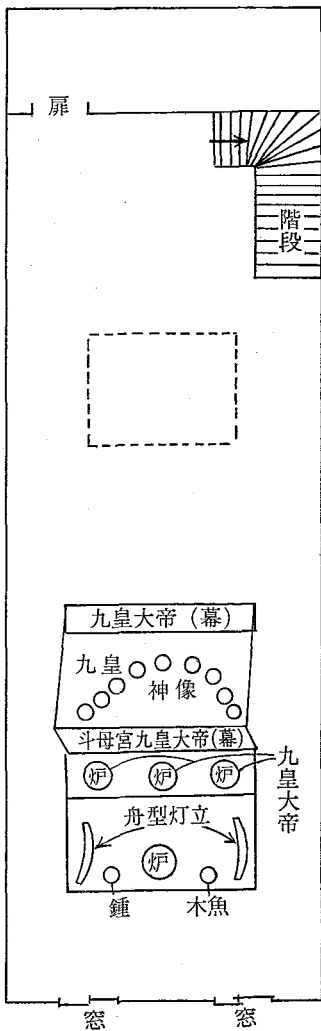
八月三十日、午後九時になると銅鑼を烈しく撃ち鳴らして、興奮状態を作り始め、通りでは行列の準備にかかる。

九時半一たん銅鑼を止めるが、その時になると夢遊状態になった童叟が、一人ずつ階段を踏み外して二階から落ちてくる。それを受け止めて椅子に腰かけさせると、首をぐるぐる廻しながら自己催眠を始める。やがてさっと飛び上った所を押さえて、壁にある神の名を記した黄色い服を着せる。白いズボン下にも黄色い帯をしめている。着せ終ると鞭を持ってゆらゆらと歩きながら通りへ出ていく。

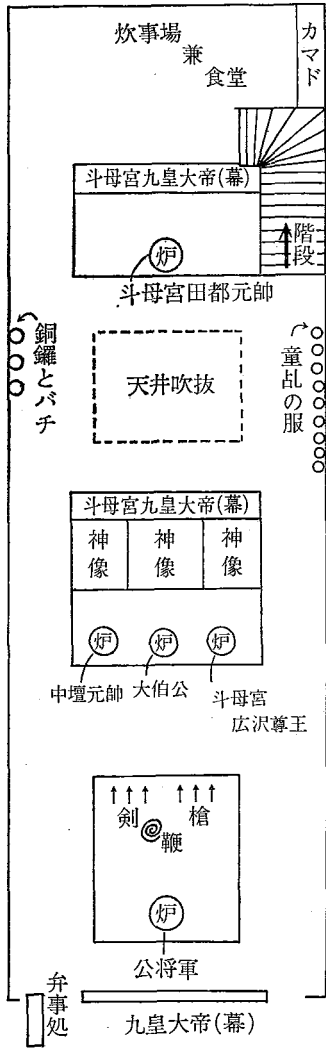
頭条路の童叟の服に記された神の名は、

東南アジア華人社会の伝統芸能

斗母宮 二階



斗母宮 一階



木吒二太子 哪吒三太子 西甞殿 広沢尊王  
 大太子 広沢尊王 田都元帥であつた。

善才童子

中壇元帥

西天李府元帥

三頭李府元帥

金吒

Magazine Rd.

童胤の人数は八人であったが、これは別にきまりがあるわけではないことである。

やがて黒旗に挟まれた一人の青年が奥から走り出て輿に何かを乗せる。ここで、待ちかねていた行列が、斗母宮九皇大帝の横幕を先頭に出発する。それから神々の旗、発電車、輿、童胤の順で、Magazine Rd., Lebuh Pantai, Jalan Prangin, Pengkalan Weld へ出て、金網でしきられた一角の網戸を開いて海岸へと向う。ここは中嶋氏が警官から聞いた地名は頭土橋尾だという。この一角つまり Lintang Merdeka はスラム街であって、ふだんは隔離されているようである。ここへ入って海岸までの中間地点に祭壇を設けて全鎮壇の道士が呪文を唱え、角笛風の笛を吹くと、童胤は岸壁まで来て海に向って祈り、突然ふりむいて馳け出す。なかには岸壁で焚かれた紙銭を掴み、火の粉を散らしながら馳け出す童胤もいる。もとの道を引き返して斗母宮へ帰ると、醒獅団が獅子を舞わせながら迎える。これで九皇爺は斗母宮へ迎えられたのであり、帰着は十時半過ぎであった。演劇の方は行列の通過の際小休止するが、ほとんど関係なく続けられている。観客は道一杯に埋めつくすほどであり、シンガポールの盂蘭勝会よりも多い。

九月初一日は九時に出発ということであったが、斗母宮に着いた時はすでにトラックで出発したあとであり、あわててタクシーで追跡した。逆廻りのコースを取れば途中で出逢うのだが、順序通り確認しようとしたので、遂に追付かず、各寺廟でどのような挨拶のしかたをするのかは確認できなかった。コースはジョージタウンから空港への道を取る。最初の城隍廟は日落洞 (Telutong) の斗母宮であり、ここも九皇爺を迎えて賑わっていた。万脚蘭 (SG. Kluang) の福興宮清水祖師は、いわゆる蛇寺であって青帮の頭領清水祖師を主神とし、左に閻羅天子、右に注生娘娘を祀っている。ここで引返して海岸寄りの道路に入り、鳳山寺、天受宮を経て北海岸沿いに西行し、水美宮に出る。正面に朱池李王爺公を祀り、向い合って戯台がある。さらに進んで海珠嶼大伯公まで来る。ここも戯台をもつ。ここから引返

し、車水路の観音寺を経て中心街の寺廟を巡り、頭条路の斗母宮へ帰ってくる。タクシーで約二時間、帰着の時間が一致したので、九皇爺の巡行の方は三時間半ほどかかっているようである。

九月初三日は午後八時から大鍋に油を煮立て、神の憑依した童乩が表通りで線香をくわえたり、鉄釘の植えられた丸球を背中にうちついたり雨の中をはね回る。童乩の頭目だけが油の中に手を入れ、希望者の手や臂にぬりつける。これで患部を撫でると治癒するという。連日夕刻から雨になるが、これが十月のペナンの天気だということである。これらの行事の参観を許されないのは、「凡肖鼠・虎・蛇・孕婦、散房、帶孝」である。妊婦や喪中の人が遠慮するのはわかるとしても「凡そ……に似たもの」というのは解しかねる。「私はよいのか」と尋ねたら、真顔で「OK!」といわれて妙な気がした。

九月初四日も雨が降ったが、七時には巡遊の準備を始めた。先導する旗（進香旗とよんでいた）を見ると、中壇元帥、広沢尊王、九皇大帝、玄天上帝、田都元帥、福德正神、西天李府元帥、善才童子であり、信者の寄進によるので重複するものがある。先導するのは炉主と警察の偉い人のようである。童乩は頬に槍を刺し（この槍の名称を聞き漏らした。シンガポールの童乩も刺していたもの）五人は山車に乗り、三人は徒行し鞭で所々地面を叩き浄める。

Magazine Rd. から出発し、Lebuh Pantai, Lebuh Gereja, Lebuh Pitt, ここで広福宮内へ童乩が乱入し、しばらく行進が止まる。続いて Lebuh Buckingham, Carnarvon St., Pesara Claimant, Rope Walk, Jalan Prangin, Lebuh McNair, Magazine Rd. の巡路であった。途中で三軒の家の前に設けられた祭壇の前で獅子が舞ったので、正・副炉主と思われる。だとすれば、巡路は年によって多少変更されるのであろう。街角には警官が立って交通整理に当っており、行き逢う人は老人・婦人・子供のほかバイクで通りかかった青年も拝をする。インド人も拝をした。演劇も巡



巡遊中の童乩



全鎮壇道士の清醮

行の出發時と帰着時に一時中止した。九月初六日は午前七時半に追加して十一時にも全鎮壇道士（斗母宮に集っていた人は、道士を風水先生と呼んでいた）の清醮があり、この日は島内の諸神を招いての宴会のようなものである。向って左から、

- ① 本地籃暉公
- ② 善才童子福徳正神
- ③ 二元帥金吒子木吒太
- ④ 清水祖田都元帥
- ⑤ 清龍保生大帝 観音亭仏祖媽
- ⑥ 城隍廟城隍公
- ⑦ 万寿道祖老君
- ⑧ 三界十極高真
- ⑨ 各家主命星君
- ⑩ 斗母宮九皇大帝
- ⑪ 広沢尊玄天帝上
- ⑫ 中壇元齊天聖大
- ⑬ 本壇中列位尊神
- ⑭ 合境正神明
- ⑮ 五營諸位兵馬

東南アジア華人社会の伝統芸能

の名が記された黄紙の包みが一階の祭壇の槍・劍を取り払って並べられ、その前に十数種の供物が供えられる。供物の名は、

米粉 金針 木耳 *Clasi* 香菇 豆腐皮 萍果 香蕉 柑 餅 甘蔗 葡萄 花  
烏亀(紅包)

というが、別の人は、利得片、章菜、冬粉、付支などの名を挙げ、正確には同定できない。

道士は呪文を唱え、随従の道士が一人は鐘を、一人は笛(角笛風)を鳴り物として添える。やがて通りに近い祭壇と奥の田都元帥を祀った祭壇の前とくるくる廻りながら、花を水にひたして撒き、供物を捧げて神饌とし、一応本式の清醮であった。

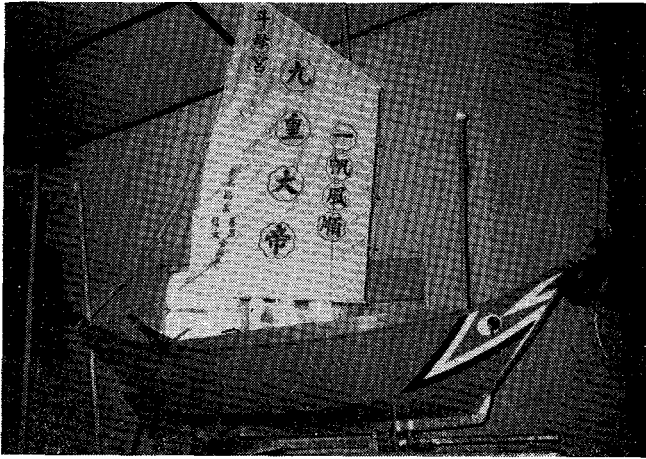
香港の長洲島で見た清醮は、五か所に信者の供えた供物を置き、鐘を叩き笛を鳴らして巡り、旗を持って巡り浄める。斗母宮は場所が狭く道士の数も少いが、形式としては同じであると思われる。

夜七時半からの「抱紅柑」は、コンロの炭火の中で三日三晩焼いた鉄丸を道路に出してころがし、時々両手で挟んで空中に投げあげるといふ荒わざをするのである。Magazine Rd. の半分位を使って両側に堵列する観衆の間を投げるので、かなり危険であるが、空中に上った時にまだ赤く見えるのは壯観である。最後に斗母宮前で黒くなった丸球を世話人が片付けるが、水にひたした新聞紙を何枚も重ねて持つと、ジュッーと音たてて白煙を上げる。開始はやや遅れ、八時に童品が道路へ出て、八時十五分に「抱紅柑」を開始し、三十五分に終った。あとは「問事」などをして九時に行事一切が終る。この日の見物禁止に該当するのは、「孕婦、散房、帯孝」の他に「凡肖虎・蛇・猴」である。

九月初九日の早朝に「抄米粉」の儀式をするという情報を、中嶋氏から得て午前中に行つて尋ねたが、何もしな



ったという返事であった。これについては「通告」(頭条路では黒板に書き、二条路は貼紙をする)は何もなく、二人で顔を見合わせる。ただし本殿から通りを隔てて建てた高い旗竿(「九哥灯脚」という)の前に炉主らが集り、道士に従って拝をした。



斗母宮に安置された皇船



海岸へ運ばれる皇船

地元の劉果因、温梓川の両氏は見物したことがないということなので同行し、夕食後、頭条路の斗母宮へ行く。長蛇の列があるので行ってみると、「平安閣」「添寿閣」であって、木製の関所を通して、童叟から背中に印を捺してもらっていた。行列の整理には警官が出勤している。割り込みはできないかと警官に

交渉したが、これだけ並んでいるのだからと断わられた。

十時十五分「回駕」の行列が出発する予定であったが、約一時間遅れて出発、経路は初四日の巡行路と違ったが信者の行列の最後に旗、山車、獅子、大銅鑼、後尾に九皇大帝を乗せた木製の舟などがあり、経路を正確に記録する余裕がなかった。最後に Pengkalan Weld の Lebuh Chulia と交叉する辺りの碼頭に来て、砂浜に持参の線香を立て、供物を供え、祭壇を作って道士が呪文を唱える中を、少し先の船にまで九皇大帝聖舟を運んで乗せ、South Channel へと出港した。出港前に気を付けて見ていたが、どうやら九皇大帝聖舟には、袋に詰めた砂を積み込んだ様子である。海峡を漂ううちに海底に姿を没するのである。「神の舟は海峡で姿を消す」とやや神秘的に説明をしてくれたが、本気で言ったのであろうか。

神事が終り、人々が家路へ急ぎ始めた時は午前一時に近かった。

### 二条路の斗母宮

頭条路と並行する二条路 (Lebuh Noordin) の斗母宮は、近年信者が増加し「酬神戯」もするようになったというが、近いので併せて観察した。

### 行事日程

九月初一日起、聘請南藝閣劇団、演梨九天酬神。

九月初三日晚上九時半 玩油鍋 凡肖虎・竜・蛇・帶孝、有身孕、廻避。

九月初五日早上 聘請道士做醮。 晚上九点 抱火球 (廻避は初三日と同じ)。

九月初六日下午 ト選一九八〇年度正副炉主及頭家炉。

九月初七日晚上 過刀橋（帶孝者以外すべて參觀可）。

九月初九晚上七点起、過「平安關」 九点、九皇回駕大遊行（實際は八時四十五分に出発した）。

九月初三日に巡遊したということを、頭条路のメンバーからあとで聞いたが、行事日程にはなかった。

また九月初七日の「過刀橋」は頭条路にはない行事であった。二メートルほどの高さに橋を作って、橋板の代りに「刀」（まき割りのように頑丈で、齒の鋭くない刀）を約四十本並べ、一方が上りの階段、他方に玉皇大帝の祭壇を設け、この刀の上を渡って祭壇に到り拝するということである。地上で首を振っている童舩も、橋を渡る際は緊張して真剣な面持で、一步一步平均台を渡るような足どりであった。世話人がフラッシュ撮影を禁止したのは、精神の集中を妨げるからであろうが、特殊な能力を示す演技としては、底が割れたという感じを持った。

なお二条路の童舩は手首に黄色の紐を巻きつけており、この方が古い形とは劉果因氏の説明であった。  
二条路の斗母宮の現在地の創建については、

「檳城二条路斗母宮及拡張後樓縁起」によると、

一九七二年由林針忠等發起、一九七四年聖誕時興建前殿、一九七五年拡張後樓、本宮始告落成。

一九七六年十月二三日（丙申九月初一日）

と理事会名の佈告があるので、歴史は比較的新しいことがわかる。もっとも元は土橋尾にあって、壇主は王探花と林小代であったと説明しているので、頭条路の斗母宮同様創壇の時期については明らかではない。

在地の神々の招宴では、②福徳正神文武判官 ③金塔太子善才童 ④中壇元齊天聖 ⑤清水師祖田都元の排列順が違ってお

り、全体は逆の排列であった。

九月初九日の送皇遊行の順序は佈告によると、

- ① 領隊…本官名誉主席及顧問 ② 大鑼 ③ 進香旗及燈綵 ④ 燈火…小太陽車 ⑤ 新旧炉主頭家燈籠 ⑥ 金鼓隊…頭壇開路先鋒 ⑦ 舞獅…禪山六合健身社 ⑧ 燈光…小太陽車 ⑨ 脚車隊…壠尾脚車特技隊 ⑩ 鼓車隊…海境新路 ⑪ 金鼓隊及神輦…大晉公壇 ⑫ 鼓車隊…土橋尾鼓隊 ⑬ 金鼓隊…鳳山宮 ⑭ 小太陽車 ⑮ 舞獅…振華健身社 ⑯ 金鼓隊…童海宮 ⑰ 鼓車隊…八条路鼓隊 ⑱ 金鼓隊…頭靈壇 ⑲ 鼓車隊…吉靈万山鼓隊 ⑳ 金鼓隊及神輦…天生宮 ㉑ 皇船 ㉒ 九皇皇輦

であるが、中間に線香を持つ信者の列が入り、脚車隊（一輪車、インド人の少年も隊員中に見られた）などは前後に割り込むので、大混雑の行列であった。その間を三人、四人と一団となった童唄が通過したが、総計二十一人を数えた。齊天大聖の旗もあり、二条路から南方の各壇総動員という感じである。

行列は二条路から横路に入り、八条路から城隍廟街、港仔街、社尾街、打鉄街、中街、牛干冬街、海境を通過して柴路頭姓林橋で解散ということであるが、街路の中国名の同定に適當な資料がなく確認はできなかった。十一時頃解散したようである。結論から言えば、二条路は頭条路に匹敵する実力を持つようであるが、「酬神戯」の経費は信者の加演に頼っているのではないかと思われる。（付表1 42ページ参照）

#### その他の九皇爺法会

以下は聞書きと新聞報道による九皇爺法会についてのメモである。

檳城打鎗埔 (Penang)

九月初五日下午一時 神輦花車を出し九皇爺の巡行。

安邦南天宮斗母宮 (Kuala Lumpur)

八月三十日晚上 九皇爺晉殿事。

九月初三日晚上 元帥爺晉殿事。

ここへは、九月十日に行ってみたが、南天宮の規模は大きく、泊り込みの信者のために、食事付個室八〇マレーシアドル、ザコ寐のベッドは同じく三〇ドルで申込みを受けたという。この日も新麒麟園劇団が「酬神戲」を上演しており、舞台は仮設ではない。しかし、片付けをする人の姿がいくらか見えるだけで見物人の姿はなく、廢墟のような気配が漂っていた。タクシーの運転手はこの附近には客属が多いといったが、耳にしたのは福建語であった。

北海觀音亭斗母宮 (Butterworth)

八月三十日晚上 迎接神駕。

九月初三日晚上八點 迎神遊行。

大年普門殿斗母宮 (S. Petani)

八月三十日晚上十時 迎接九皇大帝。

九月初三日晚上八時 九皇大帝神輦巡遊。

九月初四・五・六日 聘請新藝潮劇團演梨酬神。

九皇大帝降諭指示扶期 洗油湯、過火路、過平安城。

東南アジア華人社会の伝統芸能

九月初九日晚上十時 敬送九皇大帝回宮。

九月十五日上午十時 施濟各族貧老、白米・紅包・面巾・藥物。

吉北武吉檳榔玄鳳壇斗母宮 (Alor Setar)

九月初七日晚上九時 公演一場神怪打鬥巨片「陳靖姑収妖」以酬神。

廟には朝・晩精進食を用意し善男信女の食用に供するとある。パナンの香港巷の斗母宮は「酬神戲」がなかったの  
で、映画の上映は中規模の「酬神戲」と見なすことができようか。

大山脚斗母宮 (Butterworth)

九月初七日 北海新芭觀音亭斗母宮と合同で花車遊行隊の巡遊をする。

吉打斗母宮 (Kuala Kedah)

由八月三十日起至九月初九日一連十天、礼聘福建新美鳳劇団献演酬神。

九月初九日晚上 九皇大帝出遊。参加団体、①斗母宮九皇大帝横綵 ②領隊 ③本宮小旗 ④吉打港口保長衙大

旗隊 ⑤吉打小販商業公会大旗隊 ⑥北吉打華人電車工会鑼鼓隊 ⑦天祺街大旗鑼鼓隊 ⑧亞羅士打親善旗鼓隊 ⑨

亞依淡宝月殿花車鑼鼓隊 ⑩亞羅士打新邦瓜拉大旗鼓隊 ⑪太子路大旗鼓隊 ⑫吉打普南道壇鑼鼓隊 ⑬吉坡電器承

接商公会大旗鼓隊 ⑭弄呀路福利組大旗・花車・鑼鼓隊 ⑮新鳳美劇団花車・古裝音楽 ⑯電火車 ⑰秀女花籃隊

⑱花水車 ⑲衆神乩童 ⑳神輦 ㉑電火車 ㉒茶水車 ㉓馬頭鑼 ㉔本宮大灯 ㉕皇船 ㉖九皇乩童 ㉗副炬 ㉘正

炬 ㉙電火車 ㉚衆善男信女拜送 ㉛電火車

行列の内容のわかる少い例の一つであるが、これを見ると参加団体に工会、商会、劇団などの名が見え、他と少し

様子が違うようである。九皇爺の主催者について質問した際、あるインテリは、彼らは会党であって別に悪いことをするわけではないが、マーケットなどを縄張りに行っているといつて、余り接触しない方がよいような口振りであった。吉打の九皇爺の参加団体を見ると、あるいは見世物化したためかとも考えられるが、町を挙げてという感じがする。実際を見たわけではないので断言は避けるべきであるが、少し様相が違うのではなからうかと思われる。

#### 怡保斗母宮 (Ipoh)

由八月廿六日起至八月三十日 歌劇義唱、粵劇売戲票、素食義売、全部収入捐助怡保培南独中第三期建校基金。祭祀行事については、報道がないのでわからないが、粵劇であることが地域の特異性を証明しているようである。またすべて免費とせず、売り上げ二万一、〇〇〇ドルをそっくり寄付しているのも、目立つ点である。

#### 玻斗母宮

九月初七日出遊の予定を初八日に変更という記事があった。隊列は、①斗母宮先隊 ②七彩旗隊 ③神轎 ④斗母宮大旗鼓隊 ⑤小販商業鑼鼓及醒獅團 ⑥甲板聯誼社鑼鼓隊 ⑦十字港馬青大旗鼓隊 ⑧新路大伯公廟鑼鼓八音隊 ⑨巫婁慶安宮大鑼鼓隊とある。

九月初九日の九皇大帝回駕は、ペナン島の斗母宮——頭条路、二条路、車水路、日落洞、香港巷、打鎗埔——六か所で一斉に行われたと十月三十一日（農曆九月十一日）付の光華日報が報じている。ペナン島の九皇爺が最大の規模だといわれる理由は、狭い島で同時に九皇大帝の聖舟が護送されるということにあるようだ。海へ還るといっても、島ゆえに本格的に行われるということかもしれない。

シンガポールは群小の斗母宮はなく、竜南殿だけのようである。ここは九皇大帝の法会の時だけ公開されるので、ふだんは見られないとのことである。この時期に九斗母、九皇大帝と南北斗星君の聖誕が祝われる。その日程等は、竜南殿理事と当家の佈告（行事開始の前日、新聞に発表される）によって知ることができる。

新加坡竜南殿観音大士白衣仏祖建九皇法会

八月廿四日寅時 迎請九斗母、九皇大二九帝法駕到本殿。

八月廿九日至九月初十日 加冷旧飛場勞動公園、建法会道場及獻演潮劇十二天。

八月廿九日至卅日 演鶯燕閣劇團（兩天）

九月初一日至初五日 演老一枝香潮劇團（五天）

九月初六日至初十日 演鶯燕閣劇團（五天）

八月廿四日寅時 往南方海濱南天門接香、迎接九皇大二帝聖駕、晉九皇聖殿。

八月卅日早八點 由勞動公園道場、奉九皇聖主聖轎出發、巡遊我国大海開港門及各市鎮鄉村。

九月初一日起至初九日一連九天 打清齋醮、敬奉行十方諸仏蓮池海会。

九月初五・六・七日晚七點 老幼過九皇橋関及衣衫蓋宝印。

九月初七日中午十點卅分 依法供養三宝仏僧。

九月初八日晚七點半 集体聯席誦經、求世界和平、並雕有六尺四寸玉皇及地母金元君金像、供万民朝拜。

九月初九日晚七點 九皇大二帝勅令成千數万信衆、举行奉送九皇九千九大帝。……是晚、举行盛大莊嚴隆重大

無畏儀式、三步一跪、奉送九皇聖主法駕、転海波山帰天府大願……滙合竜南寺朝香信衆後、奉送海濱回鑾。



シンガポール九皇爺法会の特色は、仏式であること、国策に忠実であろうとするこの二点で、マレーシアで見た斗母宮の祭祀行事とは異質である。

仏式であることは、巡遊の目的に当る部分に「我国大海開港門及各市鎮鄉村淨油火、興旺繁榮社会、救苦救難超脱一切權難亡魂冥陽兩利、供万民迎香敬拜求平安及保政護国」（傍点筆者、以下同じ）とある傍点の部分を見れば、「亡魂」の救済が正面に押し出されていることがわかる。また仏弟子国竜藉仏経題なる「偈付」は、

人身難得	中華難生	正道難遇	九皇難逢	知者必敬	不妄為人	有錢出錢	有力出力
合弁法会	引渡衆生	食齋戒殺	信奉九皇	孝敬天地	求世和平	生生榮華	世世富貴
信者福報	不信自棄	因果定律	絲毫不差	並非妄說	有仏可証	能捨世榮	帰仏法僧
從聞思修	持戒定慧	去貪瞋癡	順八正道	出世間法	可得極果	悟涅槃樂	心性永恆
不生不滅	大地衆生	皆可得之	同歸如來				

とある。なお国竜は鄭木榮、「二飽飯国竜居士」と名のり、竜南殿の理事である。

国策については、巡遊の目的中の「保政護国」の句の他に、「祈求国泰民安、世界和平、消滅戰禍、衆生得安寧、士農工商得興旺」といった句があって、シンガポールのおかれた位置を暗示している。これらが「合境平安、風調雨順、全民安樂」（大山脚斗母宮）といった自然民的希求と同日に論じられないばかりでなく、仏弟子国老一頓飯・鄭木榮合十敬題なる「九皇大二帝法会敬献『推広華語運動』」に

飲水要思源	推広講華語	團円因中原	掲發聖哲教	救世之精華	貫通四八達	広結万国縁
談道及講理	巩固世和平	禁戒烟与酒	強身建国基	耀祖伝後裔	五倫学善道	不殺乱世消

永世享太平

とあるのは、目下政府のイニシアティブで盛大に行われているキャンペーンに協力を表明したと見てよからう。

巡遊は斉天大聖聖誕の行事と同様トラックとバスを利用しているのは、交通事情を合わせ考えとしても、ハダシで歩き廻る素朴さはここにはない。

法会の趣旨を述べた文の中に、九皇爺の伝承に関する部分があるので摘記しておく。

法会……紀念九皇諸大帝、古時千万修道義結兄弟、眼見中原受難、天無日月光明、大地黑暗、被魔困、人命生靈遭受殘殺滅害、又遇天災飢荒交迫、衆生處於絕境之危機。九皇千万兄弟、見義即發大無畏精神願力、集体威勇、下山舍身、救護中原、為國為民、伏魔而平天下、恢復人倫、其境苦難、難言難容。威勇浩氣感動天地、得三十三天協利天皇「即玉皇」、封為統御三界掌理万靈生死壽命之權威、即南北斗星君是也。維護如來佛法正道及因果善惡罪報、生死輪廻、人神衆生之主宰、後人知之、不分宗教信仰、当必喫素戒殺紀念敬之、以表報答孝敬天地父母之恩。

……  
九皇爺については前掲原田論文にくわしいが、抵抗者ではなく、護国の意を玉皇に買われて南北斗星君となり、生死壽命の権力者となったという説に立っている。

実際の情景を見ていないので断定はできないが、送駕の参加には白衣の着用と齋戒することを求めているので、——白衣が喪服なので、九皇爺を中道で斃れた抵抗者とする説を信ずる人がいることも事実である——参加者の形や信仰と、主催者の趣旨とがずれているのではないかと思われる。

なお「申」年に当たったためか、「庚申斉天大聖年 三打白骨精 唯物判真仮 一棒平天下 維護仏正道」の句も佈

告に見られる。孫悟空を護法神と見れば仏教に取り込まれても不思議ではないが、独立して福建幫に信仰されていることの関係も知りたいことの一つである。(南洋商報、馬來西亜版 七九、一〇、一九による)

タイの九皇爺聖誕は、その時期を外したのでくわしいことはわからないが、仏教系と民間信仰の系統が混在しているようである。

パンコクには潮州系華人が多いといわれるが、その潮汕出身者のために、一九七九年十月二十八日、姚璇秋を団長とする広東潮劇団一行六十二人がタイ皇帝慈善基金社会福利院と泰中友好協会の招きでタイを訪問し、慈善公演を行うことになっていた。上演は、十一月一日から五日までナショナル劇場——初日は皇帝が観劇するので入場料は一、〇〇〇バーツ(一バーツは約十円)と五〇〇バーツ。二日以後は五〇〇バーツ、三〇〇バーツ、一〇〇バーツ。——八日から十一日、十三日から十八日、廿日から廿六日は法政大学講堂——入場料は三〇〇バーツ、二〇〇バーツ、一〇〇バーツ、五〇バーツ——で行われることになっており、その間に十四日の午前に普門報恩寺を参観する計画になっていた。一行には名丑の李有存、蔡錦坤が加わっており、団長の姚女士は現代中国の潮劇団きっての名優といわれているので、中国政府の力の入れ方も想像される。演目も「荔鏡記」(陳三五娘)「統荔鏡記」「鬧釵」「苧林会」「刺梁翼」「擋馬」が予定されていた。収入はすべてタイ皇帝の慈善基金社会福利院に寄附されるというので、受入れ側もパンコク華僑団体を総動員しているように見うけられる。(この組織はいろいろの意味で興味があるので付表4とした)さて、その普門報恩寺に九皇爺の祭祀日程と壇名があげられていた。これは場所、行事名からすると仏式に属すると思われる。



バンコクの普門報恩寺

本寺年例定於八月三十日至九月初十日啓建

九皇勝會慶讚道場十昼連宵

八月三十日上午九点 迎請聖駕

九月初六日上午九点 讚星放生

初九日下午十二点 焰口施幽

初十日上午九点 恭送聖駕

仏王永樂壇 仁意大師 仁義大師

万沛紫光問 仁願大師 仁信大師

三攀乾坤壇 仁施大師 仁深大師

呵叻合盛壇 仁誼大師 仁依大師

万象賜福壇 仁河大師 仁慧大師

万福壇 仁焜大師 仁文大師

万熹万興壇 仁福大師 仁祐大師

旧岡永福壇 仁弘大師

挽例福興壇 仁君大師 仁眷大師

北真福祿壇 仁彩大師 仁錦大師

北柳万金如意壇 仁德大師 仁海大師

素攀清香壇 仁果大師 仁梵大師

万象同興壇 仁攀大師 仁銘大師

竜蓮寺 仁光大師 仁礼大師 仁勉大師 仁潮大師

万象福願壇 仁孝大師 仁旺大師

マレーシアの九皇爺祭事を調査する前であったので迂闊に見逃したが、壇主が大師名であるというのは、シンガポール同様仏教儀礼に取り込まれた九皇勝会で、「讚生放生」「焰口施幽」という儀式は孟蘭勝会との類似を感じさせる。改めて調査すべきであろう。

付記 一九八〇年二月一日に東京十二チャンネルのテレビ放送、金曜スペシャル「決定版タイ奇習残酷大特集」という題の放映があり、インド洋に面する島ブーケットの斗母宮九皇大帝の祭祀をうつし出した。九皇大帝については疫病をはらった神という説明で、行者（童乩）の超能力を「奇習残酷」として取材したものであった。信者たちは二週間肉を断って菜食白飯の生活をし、九日間にわたる祭祀行事に参加する。童乩は夜、刀を段にした梯子三十六段を上って下りる。炭火の上を渡る。針の丸球に腰かける。串を体に刺して片道十五キロメートルの通りを往復する。神輿の巡遊があるといった場面の断片的紹介のため全容はわからないが、童乩を主とする祭りであることは間違いない。ただ爆竹を鳴らすこと、楽器の小鼓、銅鑼は同じであるが太鼓が長鼓であり音楽が異なるなど、マレーシアとはやや趣が違っていた。なお、主体が何系の華人かということ、「酬神戯」の有無などは関心外であったように、紹介されなかったが、九皇爺信仰の伝播の広さをうかがうことができた。

附表 1 「酬神戲」

シンガポール  
農曆八月

日	劇 団 名	日 數	劇 種	主 催 者	祭 神
初九、十、十一	華報善堂 (舞) 老玉樓春	二天	潮	華興堂	齊天大聖 玄天上帝 三田都元帥 護國張太保
*十三	莆仙業余劇團		福建	齊雲殿?	巍山大王
十三、五	新榮和興潮劇團	三天	潮	合興 太元光廟	福德正神
十五、八	新賽鳳閣劇團	四天	閩	聖寶壇	齊天大聖
十九	(歌台) 無し	一天		慈忠壇	齊天大聖
十六、七	老一枝香班	二天	潮	童聖壇	齊天大聖 衆位諸神
十六、七	老賽桃源班	二天	潮	福德神社	玄天上帝 福德正神 廣天尊王 天地父母 衆位諸神
十六、七	興安業余劇團	二天			齊天大聖
十六、八	新麒麟閣劇團	三天	閩	聖南壇	齊天大聖
廿、廿二	新榮和興班	三天	潮	鉄玄壇	鳥面元帥 諸位衆神

廿一、廿二	老賽桃源班	二天	潮	福德神社	玄天上帝 福德正神 廣澤尊王 天地父母 衆位諸神
廿七、廿八	新榮和興班	二天	潮	修德善堂分堂	宋大峰祖師
廿九、卅	鷺燕閣劇團	二天	閩	童南殿	九皇大帝
九月初一～五	老一枝香潮劇團	五天	潮	童南殿	九皇大帝
九月初六～十	鷺燕閣劇團	五天	閩	童南殿	九皇大帝

その他の時期

農曆正月

初八、十	新榮和興班	三天	潮	鉄玄壇	答謝神恩
十六、七	新慶華班	二天	閩	齊天宮	齊天大聖
廿六、八	新榮和興潮劇團	三天	潮	潮安金砂鄉曾氏	龍尾聖王 夫人
廿八、九	南藝劇團	二天	閩	中国街 順豐	玉皇上帝

農曆二月

十五	(歌仔戲)	一天	閩	陳氏宗祠	氏祖重華公
廿二	双飛燕劇團	二天	閩	鳳山寺	廣沢尊王
廿四	新賽鳳劇團	一天	閩	鳳山寺 (洪同益加演)	廣沢尊王

農曆三月 無し

農曆四月 無し

東南アジア華人社会の伝統芸能

農曆五月

廿一、廿二	鳳□□□	二天	龍山宮	協天大帝 張天師公
-------	------	----	-----	--------------

農曆六月

廿一、廿二	双飛燕閩劇團	二天	蓮花壇	李三太子 四者將軍
廿六	藝声劇團	一台	福德祠	天地父母 福德正神
廿六、廿七	夢者歌台	二天	披沙街大伯公	衆位諸神 大伯公
廿六、廿七	新榮和興班	二天	聖玄壇	福德正神 諸位衆神

潤六月

廿四、廿五	新賽鳳閩劇團	二天	瓊瑤教邸	卓仙真人
廿六、廿七	新榮和興班	二天	聖玄壇	福德正神 諸位衆神

農曆九月

初一、二	中一天香	二天	龍玄壇	玄天上帝 衆位諸神
三、五	織雲劇團	三天		
十一、十三	老玉樓春班	三天	潮	龜嶼大伯公 感天大帝



十四、十五 十六 廿八、卅	老玉楼春班 老一枝香班 老賽桃源劇団	二天 一天 三天	潮 潮 潮	大伯公宮(福名氏加演) 大伯公宮	龜嶼大伯公 龜嶼大伯公
---------------------	--------------------------	----------------	-------------	---------------------	----------------

農曆十月 無し

農曆十一月

*初四 *十六	(歌仔戲)	一天 一天	閩	陳氏宗祠 同德善堂	氏祖重華公 運杰菩薩
------------	-------	----------	---	--------------	---------------

農曆十二月 無し

注

\* 1 巍山大王の誕生日は不明。偶然発見し観劇したが、周辺に祭壇がなく、おそらく少数派である莆田・仙遊出身者が既設の戲棚を借用しての上演であろう。

\* 2 農曆二月廿二日は鳳山寺で広沢尊王聖誕法会が行われ、双飛燕劇団の上演は廿二、廿三日の二天、廿四日の新賽鳳劇団の上演は洪同益が加演奉納したものである。

\* 3 福邑公建普度の王志才氏の話では、三月廿日に福建寺院(天后廟)で閩劇の上演があるという。

\* 4 蓮聖壇付近の婦人の話では、四月二十九日に蓮聖壇では大祭をし、獅子、猿の祭、大戯を上演するという。

\* 5 一九七九年は六月が潤月であったので、六月と潤六月と二度聖誕の祭祀を行っている。

\* 6 これは「功德堂行祭」「贖放水港飛行」の宗教行事のみで、演劇を伴わぬものかもしれない。

マレーシア

農曆八・九・十月

日	劇 団 名	日数	劇種	主 催 者	祭 神
農曆八月 廿三、廿五 廿五、廿九 廿六、卅	雅声閩劇団	三天	閩	檳城宝福社 華玲竜山宮	大伯公
卅、九月初一、十 卅、九月初一、九 (初六)	(歌台) (粵劇) 新麒麟閩劇団 筱鳳閩劇団 筱鳳閩劇団	五天 十天 一天	粵 閩 閩	怡保斗母宮 安邦斗母宮 檳城頭条路斗母宮 (林莞美加演)	九皇大帝 九皇大帝 九皇大帝
卅、九月初一、七 九月初八、九 卅、九月初一、九 農曆九月 初一、九	蕪坡麒麟閩劇団 劉冰歌劇団 福建新美鳳劇団 南藝閩劇団	八天 二天 十天 九天	閩 閩 閩	北海新芭觀音亭斗母宮 北海新芭觀音亭斗母宮 吉打斗母宮 檳城二条路斗母宮 (陳金昭加演)	九皇大帝 九皇大帝 九皇大帝
(初二) (初二) (初八) (初九) 初四、六	新藝潮劇団	三天	潮	雙溪大年普門殿斗母宮 檳城良宝堂	九皇大帝
初四、五	鳴鳳閣掌中班	二天		檳城竜溪堂	王・張・李三王府大 人聖誕
初四、五	春之花歌台	二天			王・張・李三王府大 人聖誕

初四、六	(掌中班)	三天	檳城龍溪堂	王・張・李三王府大人聖誕
初七	電影(陳靖姑收妖)	一天	吉北武吉檳榔玄鳳壇斗母宮	九皇大帝
初八	雅声閩劇團	一天	北海拉惹烏達律斗母宮	九皇大帝
初十、十一	新月明閩劇團	二天	北海鳳凰山	東海哪咤公聖誕
十二、十五	溜冰歌劇團	四天	亞羅士打過港三太子廟	三太子聖誕
十四、十八	紅土坎五月花歌劇團	五天	檳城広福宮	中壇元帥聖誕
十八、廿九	新月明閩劇團	三天	(許篤元答謝)	
(廿一)	鳴玉鳳掌中班	一天	(辛建文答謝)	
(廿二)	同	一天	(洪耀發答謝)	
(廿三、廿四)	同	二天	(李斯万答謝)	
(廿五、廿六)	同	二天	(楊連來答謝)	
(廿七、廿九)	同	三天	(李木海答謝)	
農曆十月				
十四、十五	(演劇)	二天	檳城瓊州會館	水尾聖娘聖誕

記 マレーシアは九皇大帝調査に当って、期日の近い大伯公その他の祭祀と酬神戲の情報が得られたのであって、祭神の多様さから考えれば、当然さらに多くの祭祀行事が予想される。

タイ

時期	劇団名	日数	劇種	主催者	祭神
農曆六月 十八、廿	怡梨香班	三天	潮	三聘娘宮社	慈悲娘娘聖誕 天地父母 諸位福神
農曆七月 初七、八	老正天香班	二天	潮	孔堤社玄天古廟	好命公婆誕日 天地父母 諸位福神
十一、十二	電影	二天		孔堤碧龍宮	盂蘭勝會
十八、廿	電影	三天		噯以仔福蓮宮	本頭媽 天地父母 天后聖母 諸位福神
農曆八月 十六	電影	一天		挽盛金王爺新廟	金王聖帝誕辰吉日
廿一、廿六	老賽和興班(坐唱)	一天		耀華力齊天大聖廟	大聖佛祖聖誕
農曆十一月 廿二、三	玉樓春班	六天		南那萊埠本頭公媽古廟	本頭公媽聖誕
	怡梨香班	二天	潮	潮州會館老本頭古廟	天地父母 玄天上帝 大本頭公 衆位諸神

記バンコクを調査したのは農曆八月末に近かったので、とくに祭祀行事はなく、盂蘭勝会などの佈告もほとんど見られなかつた。当地でとくに目についたのは、本頭公、本頭媽で、これは潮州帮の祭神かもしれない。

付表 2

粵海廟 (シンガポール Philip St.)

(辛亥年各社辭神)

十月二十七日 請神

十月二十八日 義安郡

十一月初二、三日 瓊州社

十一月初五、六日 客社

十一月初八、九日 貳順豐街

十一月初十、十一日 和順街

十一月十二、十三日 四順興街

十一月十六、十七日 五長興街

十一月十九、二十日 広惠肇

十一月二十一、二十二日 股三万順街

十一月二十六、二十七日 股本嘉興街

十二月十七日 回鑾

記 廟は向って左が天后宮で天后聖母が主神、陪神は向って左が龍尾聖王、右が感天大帝。向って右は上帝宮で主神が玄天上帝、陪神はない。周囲の建物は、再開発のため取りこわされていた。

附表 3 諸神聖誕日

蓮聖壇 (シンガポール Cumning St.)

本壇諸仏神 聖壽千秋聖日

正月初九日 玉皇上帝

十六日 大聖佛祖

二月十九日 觀音佛祖

廿二日 広沢尊王

三月初三日 玄天上帝

十六日 鉄府大元帥

廿九日 感天大帝

四月初二日 天台童子

初八日 善才童子

廿九日 本壇諸神 晉殿

周年紀念日

每月逢初二日十六日

敬諸神 考軍馬

威鎮廟 (シンガポール Seng Poh Rd.)

八月廿二日 広沢尊安王

六月十九日 觀音

正月二十日 招財財神

三月廿三日 媽祖

十二月初八日 如来僧

五月初六日 太子

七月初七日 太子

二月初二日 大伯公

媽祖

如来僧

太子

大伯公

宝誕

仏誕

仏誕

聖誕

聖誕

千秋

聖誕

千秋

千秋

五月十三日

六月初七日

廿二日

廿六日

七月初七日

八月十六日

九月十六日

十一月廿七日

每月逢初一日十五日

每月逢初二日十六日

山西夫子

本壇蓮花三太子

正座蓮花三太子

黑虎大將軍

福德正神

中壇大元帥

大聖佛祖

大宋三忠王

普賢佛祖

聖誕

聖誕

千秋

聖誕

千秋

千秋

千秋

仏誕

敬諸神

考軍馬

七月廿四日 城王爺  
 七月十九日 太歲  
 七月初一日 太上老君  
 二月十五日  
 七月初七日 二爺  
 三月十三日

三月十五日 三教主  
 八月十六日 大聖爺  
 五月十三日 官平  
 六月廿四日 官公

柔仏古廟 (シ・ホール・バルー Japan Trust)

本年衆神聖誕日

(天運己未年—一九七九年元月初四日立)

元月初一日 弥勒佛祖  
 初五日 孫真人  
 初七日 安濟聖夫人  
 初九日 玉皇大帝  
 二月初三日 文昌帝君  
 十九日 觀音大士  
 廿日 善才童子  
 三月初五日 元天上帝  
 十五日 保生大帝  
 廿三日 天后聖母  
 廿七日 安濟聖王  
 廿九日 感天大帝

聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕  
 聖誕

四月初八日

二太子爺

聖誕

十四日

呂祖仙師

聖誕

十五日

趙大元帥

聖誕

五月十三日

關聖帝君

聖誕

廿三日

顯祐伯公

聖誕

廿九日

太子老爺

聖誕

六月初五日

金甲神

聖誕

初六日

水禹神

聖誕

潤六月十九日

福德老爺

聖誕

七月初七日

觀音娘娘

聖誕

十五日

魁星老爺

聖誕

廿三日

孟蘭勝會

聖誕

廿四日

財帛星君

聖誕

廿九日

司命帝君

聖誕





十九日	大慈大悲觀音仏	聖誕	初四日	大成至聖孔子先師	聖誕
廿六日	譚公仙聖	聖誕	十七日	阿弥陀古仏	聖誕
七月十五日	中元赦罪地官	勝会	十九日	太陽古仏	聖誕
十六日	運誠先師	成道	十二月初一日	水法祖師	聖誕
八月初二日	道溥先師	降誕	初二日	道先李先師	降誕
初三日	灶王府君	聖誕	初八日	釈迦古仏	成道
又	慧能六祖大師	聖誕	又	水法祖師	成道
十五日	月光古仏	朝元	十五日	退安祖師	成道
又	黃龍真人	聖誕	廿四日	灶君	成道
十六日	大聖爺爺	聖誕	*	上奏良辰	
十七日	道生先師	成道	道龍先師	十月初八日降誕	
九月初一日	九皇大帝	勝会	道鏞先師	十二月初五日成道	
初九日	斗母元君	聖誕	道鏞先師	二月初三日降誕	
又	真武大帝	上升	道慶先師	十月初三日成道	
十五日	三合龍華	表文	道慶先師	十一月初九日降誕	
十九日	大慈大悲觀音仏	上升	道光先師	四月初七日成道	
十月初八日	釈迦古仏	涅槃	道光先師	九月初三日降誕	
十五日	下元解厄水官	勝会	成道	十月初十日成道	
十一月初二日	木祖致恭先師	成道			

三多廟 (マラッカ Jln. Tukang Basi)

(注) 聞き取りによる祭祀の日

観音菩薩 六月十九日

東南アジア華人社会の伝統芸能

東洋文化研究所紀要 第八十三册

五〇

九月十九日

二月十九日 (この日を觀音菩薩の聖誕という)

四月十八日

華陀  
大伯公  
二月十六日 聖誕

注生娘娘  
四月十七日

湖海殿 (マラッカ Jalan Kampung Pantai)

本殿諸神聖誕日期

三月十五日 保生大帝

六月十八日 地府王爺

正月廿七日 張公聖君

七月廿三日 城隍爺公

五月十一日 中壇元帥

七月初九日

武帝廟 (ペナン Lebuah King)

正月十三日 關帝聖誕

五月十三日 關平聖誕

六月廿四日 關帝聖誕

十月三十日 周倉聖誕

檳城福建公司 (ペナン) 内の佈告による城隍廟 (過港仔街)  
五月初八日 大爺誕

五月初九日 二爺誕

六月十九日 太歲爺誕

七月初七日 七夫人誕

七月廿四日 城隍爺誕

七月廿九日 地藏王誕

水美宮(ペナン 灣堵頭)

六月十八日 王爺公誕

福興宮(ペナン 望脚蘭)

十一 正 六月初六日 清水祖師誕

受天宮金和宮(ペナン 四坎店)

八月十五日 大伯公誕

三月十六日 華提菩薩誕

清竜宮(ペナン 日落洞)

二月十四日 神農聖帝誕

三月十五日 保生大帝誕

付表 4

訪泰潮劇團歡迎準備會委員

- (一) 大會主席 蔡猜・春哈旺少將 (二) 副主席 乃拍匿・三拍越屈、陳有漢、乃威洛・佬哈攀 (三) 大會顧問 黃作明、乃挽積・初拉威曾、陳弼臣、鄭午樓、乃汶趨・丘細見 (四) 籌備會主席 王保文 (五) 副主席 吳逢金、丁家駿、楊錫坤、陳克修、黃南榮 (六) 秘書 劉華源 (七) 副秘書 阿努差警中校、黃振忠 (八) 財政 丁家駿、黃南榮 (九) 連絡 吳逢金、乃拍匿、陳克修、黃南榮、葉祥竜、蘇国世、林長茂 (十) 司儀 阿努差警中校、丁身展、丘夏莉 (十一) 招待 鄒挽宗、蘇国世、泰中全体執委 (十二) 保安 沙冷・美滴攀警少將 (十三) 佈置 林長茂、丁身展、黃振忠、蕭名順 (十四) 攝影 黃振忠、陳創旺 (十五) 總務 蕭名順 (十六) 籌備委員 (敦請社團首長為籌委) 乃亞喃・綠蘭是警少將、中給黃作明、潮州金崇儒、客属陳喜卿、広肇関元年、海南陳昌耀、福建張篤生、江浙張杰陵、台灣葉福森、雲南馬少昌、潮安廖少賢、潮陽周鑑梅、揭陽王捷枝、普寧陳克修、澄海許朝鎮、大埔何乃創、豐順張自吟、饒平蔡棲紅、興寧黃清林、惠來楊海波、南澳吳承波。 玉蜀黍馬少銘、泰土產馬少銘、火鋸韓灼光、曼谷火礮陳守鎮、木材鄭俊英、五金蔡棲紅、米商胡玉麟、米業佃行賴長權、菸業丁瀛一、皮業蔡伝森、印刷鄧概勝、金璇馬梅洲、茶商王炳霖、泰華進出口陳来茂、工商方徳伝、袋業吳漢隆、織業徐名源、貨運胡隆城、建築黃永康、銀信陳府弼、菓業楊綿忠、相業周勤学、霜鬪林介潮。 丁氏丁家駿、六桂堂汪文盛、方氏方徳伝、王氏王捷枝、丘氏丘細見、朱氏朱胡(朝)竜、余氏余木泉、吳氏吳逢金、巫氏巫廷足、李氏李建南、杜氏杜木秋、汪氏汪文盛、沈氏沈偉汶、沈氏吳興發祥・沈克生、周氏周朝宜、林氏林炳南・林氏南山公・林岳純、侯氏侯業順、姚氏姚宗俠、洪氏洪志豊、孫氏孫炳榮、徐氏徐思恆、馬氏馬陳茂、梁氏梁潤潮、高氏高蔚為、莊氏莊木明、許氏許朝鎮、郭氏郭燕城、陳氏陳榮捷・陳家社・陳秋財、紀氏紀金輝、曾氏曾昭仁、黃氏黃繼声・黃江夏・黃同青、黃觀音山黃繼声、四知楊氏楊錫坤、鄒氏鄒益昌、廖氏廖少賢、熊氏熊易麟、蔡氏蔡棧虹、劉氏劉広安、鄧氏鄧鎮洲、鄭氏鄭午樓、盧氏盧少瑛、賴氏賴得先、謝氏謝奕如、鍾氏鍾樹燦、羅氏羅炳居、蘇氏蘇秀全、新声国業社鄒俊英 (十七) 籌備會顧問 魏煥章、鄭可樓、張木鴻、鄭学能、鍾源泉、黃永万、侯業順

記 \*は再出・三出を示す。